
テンプル犠牲者の日々【ネギま！ ネタ】

Holzbein

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレ犠牲者の日々【ネギま！ ネタ】

【Nコード】

N8255T

【作者名】

H o l z b e i n

【あらすじ】

わーにんぐ！ このお話はテンプレオリ主を兄に持つ、ネギ君のネギ君によるネギ君のためのネギ君視点の御話です。オリ主のせいで魔法恐怖症になったネギ君の日々（原作開始〜終了まで）をノリで書いたものです。以上を了承の上、どうぞ。

（前書き）

わーにんぐ（念の為）！

このお話はテンプレオリ主を兄に持つ、ネギ君のネギ君によるネギ君のためのネギ君視点の御話です。オリ主のせいで魔法恐怖症になったネギ君の日々（原作開始〜終了まで）をノリで書いたものです。以上を了承の上、どうぞ。

1・原作開始

二月の上旬、ある日の昼下がりのことである。麻帆良学園中央駅に赤毛の外国人少年の姿があった。ネギ・スプリングフィールドである。少々伸びている髪はうなじの辺りで結われており、今時珍しい鼻メガネのレンズ越しにはくりくりと可愛らしい瞳が覗かれる。臙脂色の外套を羽織ったネギの背中には、はち切れんばかりに膨れた背囊やそこにぶら下げられている鍋が背負われている。とりわけ眼が惹かれるのは白い布でぐるぐる巻かれた、何やら細長い物体だ。少年の身長は140cm弱といったところだが、その物体は頭一つ分程大きい。持ち歩くには億劫な代物である。

ネギ少年はそういった目立つ風体だったが、特に気にする素振りは見せない。平日の昼下がりであるため、そもそも周囲には人影が見られないからだ。浮かない表情のネギ少年は辺りを見まわしてそれを確認すると、一つため息をついて歩き始める。目的地は麻帆良学園中等部だ。見た目小学校も卒業していないネギ少年が何の為に行くのかと疑問に思うだろうが、そこはそれ、色々事情があるのだ。

ネギ・スプリングフィールドは魔法使いである。正確には魔法使い（仮）であるがそれはさておき、めくるめく『ふぁんたじい』世界の住人である。背中の細長い物体は父親の形見ともいうべき杖である。それを一振りすれば、事情を知らぬ読者諸兄も納得してくれることだろう。しかし今はまだその時ではない。というのもネギ少年は魔法恐怖症なのである。

何を馬鹿なと一部読者は呟いた事は想像に難くは無い。きつと貴方は、ネギ少年というのは魔法馬鹿であり、両親へのコンプレックスを持っていたり、友達コンプレックスであり、メサイアコンプレックスであり、その他上げればキリが無いのは明明白白である程の屈折した人間であることは認めるが、さておき魔法恐怖症とかいう魔法使いにあるまじき精神障害は持ち合わせていないはずであると主張するはずだ。ところが実際そうなのだから仕方あるまい。そもそもからして、ネギ少年に双子の兄が存在するという、ネギ少年にとって最悪の事実が前提を覆しているのだから。

ネギ少年の兄、名前はこの際ヤギだろうがクギだろうがミギだろうが何でもいいが、仮にラギとしよう、といっても実際問題名前はラギ・スプリングフィールドであるが、それは無視することにしよう。

このラギ少年、能力は一級も一級、はっきり言って化け物級である。魔力は父親を軽く超えている上、行使できる魔法も既に個人の域を超えている。体術も免許皆伝に至るまで修めているのだから、歩く戦略兵器ですら生易しい。そんなラギ少年ではあるが、それが明らかになったのは、そうしてネギ少年がいよいよ魔法恐怖症を患ったのもまた、例の悪魔による襲撃事件であった。

ネギ少年とラギ少年はイギリスはウエールズの山中に隠された、魔法使いの集落で育てられた。それは魔法使いが魔法を秘匿するためでもあったが、何よりも彼らが、魔法世界の英雄であり少年達の父でもあるナギ・スプリングフィールドと、一般に災厄と呼ばれるアリカ姫の関係者だったからである。英雄や災厄への怨恨を警戒するため、仕方なしに外界から隔離されていたのだ。

そんな環境であったから、二人の少年には甚だ巨大な期待が寄せ

られていた。ネギ少年は子供らしい純真さから気付いてはいなかったが、ラギ少年は年齢に似合わない理性のせい、激しく疎んじていた。そのため、ネギ少年が集落で人気を集める一方、ラギ少年は幼馴染のアーニャと一緒にいるところが時折目撃されるくらいで、目立つことなくひっそりと暮らしていたのである。

その状況が変化し始めたのは魔法を（とはいっても手習いの段階だったが）学び始めた頃のことだ。アーニャからついでのように渡された杖を使ってネギ少年は徐々に魔法へのめり込んだ。父親の影を追っていたのである。ラギ少年は熱中する素振りも微塵も見られなかった。だがいざ魔法を行使する段になるとネギ少年よりもはるかに上手にやってみせたのである。

元々魔力量自体はラギ少年の方が上であったから、集落の人々の関心は徐々にラギ少年へと傾いていった。そうして、ラギ少年は物静かではあるがしかし、別段悪い子でもないらしいということも広まった。ネギ少年に向けられていた関心は大人達も気付かぬうちにラギ少年へとシフトしたのである。それ故ネギ少年は更に更にと魔法に熱中するしかなかった。それが何を意味するのも理解せずに。

そうして来たる夜。悪魔襲撃の時。ネギ少年は魔法の在り方を知った。魔法は家々を燃やし尽くす。人を傷つけもする。石化という永劫の苦しみを与えもする。天国のような日々は一転して、地獄へと転じる。そんな可能性を秘めている。

けれどそんなことはまだどうだってよかったのだ。だってそれは皆、悪魔がやることだったから。そんな理不尽は悪魔が生み出すことに決まっているのだから。

——でもそれなら、そんな理^{あぐま}不尽をいとも容易く打ち砕く存

在はいたい何だっていうのだろう。

まだ自分と同じ、無力な子供であるはずのラギ少年が悪魔を一瞬で壊滅させた時、ネギ少年はそうやって怯えてしまったのだ。大人達でさえ無力だったというのに、ただ魔力が多いだけの子供が何もかもを壊し尽くしたのだ。愉悦を浮かべた表情で、まるでゴミでも見るような視線を投げかけて、二三呟いただけで故郷が灰塵に帰したのだ。

例えばそれがすぐ後にやって来た父親によるものだったなら、憧れだけで済んだのだろう。だって彼は自分の父親で、英雄なのだから。

当時はそのようにはつきり考えていなかったが、その後魔法学校で学べば学ぶ程その感覚は増大していった。自分もいつかあんな理不尽になるのかと思うと恐ろしくてたまらなかった。ネギ少年からは生来の純真さは失われ、暗鬱とした気分だけが広がっていた。

そんな気分では当然、友人を作ることが出来なかった。一応幼馴染のアーニャはラギ少年にべったりであつたし、その他の人々はネギ少年を遠巻きにするだけで何の関わりも持っていなかった。それでもネギ少年は現状で自分に出来ることは魔法しかないのだと自覚していたため（それでさえもラギ少年には劣るのだ！）どうにか学年次席をキープし続け、飛び級を続けた。卒業は自立に繋がりを、ひいては魔法に関わらねばならない時間の削減に繋がるはずだった。あるいは、上手いこと資金を稼げば、一般の学校に入学して魔法と関係を持たない人生を送れるかもしれないと考えていた。そうして、それは甘い考えだった。

ネギ少年は遠くに見えてきた麻帆良学園中等部を見やった。

麻帆良学園。明治時代に設立された学園都市。その実体は関東魔法協会の総本山にして外界から隔絶された空間。オブラートに包めば箱庭。包まなければ軟禁場所。魔法関係から逃がしはしないとも言われているようなものだ。泣きたくもなる。それに何よりあそこには兄がいる。憂鬱だった。

兄は魔法学校時代、何かにつけて説教を垂れた。曰く、姉離れをしろだとか、甘えを捨てろだとか、正義の味方なんて馬鹿げてるだとか、簡単に他人を巻き込むだとか、魔法の秘匿はしっかりしろだとか、そういうことだ。そんなこと言われるまでもないことなのに兄はねちねちと言ってくるのだ。まるで自分が一番正しいとも言つかのように。

事実、兄は強い。けれどそれはただ持っている力が強いだけだ。暴力的な魔法なんてナンセンスだし、その才能は魔法にしか向いていないだなんて非生産的だとは思えない。『わずかな勇気が本当の魔法』とは魔法に対するイメージを少しだけ良くしてくれた言葉だったが、兄のそれはただの傲慢だと思う。思うだけで誰にも話したことはないけれど、少なくとも自分はそう思う。

兄が苦手な理由は押しつけがましいことだけではない。何というか、兄は自分の居場所を尽く奪っていくのだ。魔法学校でもそうだったし、最終的にはネカネ姉さんもそうだった。みんな兄が微笑むと吸い寄せられてしまうのだ。とりわけ女の子がそうだった。ラギ君に比べて……等と陰口を叩かれたこともしばしばあった。泣きたいくらいだ。何しろ自分はこれから兄と一緒に女子中等部の教師をするのだ。

ネギ少年はしばらくの間続くであろう肩身の狭い生活を思い浮かべ、また一つため息をついた。

中等部の校舎に辿りついたネギ少年は数年振りに会った高畑・Ｔ・タカミチにつれられて学園長室までやって来ていた。高畑は「久しぶりだね。ネギ君」と言っただけ黙ったままだった。その表情は他にも何か言いたそうだったが、ネギ少年は視線を床に向けていたため気付いていなかった。

学園長からは教師見習いについての説明がなされた。２・Ａの副担任となること、ラギ少年共にしずな先生に教わること等だ。ネギ少年は心ここにあらずという様子で生返事を返している。

「……というわけじゃ。ダメだったら故郷に帰らねばならん。覚悟は——」

学園長はじつとネギ少年を見つめたが、やはりネギ少年はぼんやりとしている。

「ないのかの？」キリッ

「はい」

「ふおっ!？」

このような一幕もあったがさておき、教師就任は万事恙なく終了したのである。

追記：魔法バレなんてありませんでした。

追記の追記：「俺はハーレムを作る！」とラギ少年がどこかで叫んだようです。

2・図書館島事件

ネギ少年が2・Aの副担任となつてから一ヶ月が経とうとしていたある日。学園長から修業の仕上げとして2・Aの期末テスト最下位脱出の御達しが出ていた。正直ネギ少年にとってはどうでもいい教育実習生に何を期待しているんだこの爺は、という感じである。ただでさえ兄のハーレムと化している2・Aでは肩身の狭い思いをしていると言つのに。まあ、兄は妙にやる気みたいだから任せることにしよう。

結果、2・Aは学年で一位になりました。

「……原作ネギに出来たんだから、当然すぎる」

——兄はいったい何を言ってるのだから。

追記：図書館島侵入なんてありませんでした。

追記の追記：学園長の落ち込む姿が目撃されたようです。「折角スタンバったのに」

3：吸血鬼事件

追記：ラギ少年がその後エヴァンジェリンの封印を解いたようです。

追記の追記：ラギ少年が「正義正義つてうるせえんだよ！ そんな幻想（ry）」と叫びながら、エヴァに暴言を吐いたからという理由で学園の教師に暴行を加えたようです。

追記の追記の追記：そのせいでしばらくの間、教師のシフトがつかつになってしまったようです。

追記の追記の追記の追記：その文句は全てネギ少年にぶつけられたようです。

4・修学旅行編

前日に珍しくラギ少年と一緒に食事をとったネギ少年は当日、唐突に体調を崩して留守番を余儀なくされた。後から聞いたところによると、ラギ少年が行きの新幹線で何やら事件を画策していた主犯を捕まえ、その後京都ではその従犯であるフェイト少年を殺害した模様。

「面倒事に巻き込まれなくてよかった……。けほけほ」

追記：リョウメンスクナなんていなかった。

追記の追記：噛ませタローなんて最初からいなかった。

5・ヘルマン卿事件

「平和だ」

ネギ少年はラギ少年のハーレムを遠い目で見ながら呟いた。校舎の外ではざあざあと雨が降っている。

追記：ヘルマン卿は今日も瓶詰めです。

6・麻帆良祭

「ナギのこと、知りたくはありませんか？」

「結構です。胡散臭いローブ姿の人間からは何も聞きたくないです」

「」

追記：ラギ少年が武闘会で優勝したようです。

追記の追記：火星系未来人は既にハーレムの一員になっていたようです。

追記の追記の追記：そのため未来改変なんてなかったようです。

追記の追記の追記の追記：「しかしこれもある意味未来改変かもネ。御先祖様」とネギ少年が何やら言われたそうです。

7・魔法世界編

「ちよつと魔法世界行ってくるから、俺の分の仕事よろしく」

夏季休暇に入ると、ラギ少年はネギ少年にそう言つて姿を消した。ちなみにハーレムも連れて行つたようだ。マホネットによると、とあるテログループを壊滅に追い込み、ついでに魔法世界崩壊の危機を救つたとのこと。

「ラギ先生のせいで補習が出来ないのですが何とかありませんか」

「直接言つてください!」

そんなことよりも、3・A補習日程の組立の方が重要だった。

追記：コズモエンテレケイアなんて無かった。

8：原作終了

「あー終わった終わった」

「仕事はたつぷり残ってますけど」

英雄となつて久々に麻帆良に帰つて来たラギ少年にネギ少年は吐き捨てる。

「いーじゃん。英雄なんだし」

「兄さんはただ壊してきただけです!」

「まあ確かに」

「大体ですねえ……」

「つるさいなあ」

説教を始めようとするネギ少年を一瞥して、ラギ少年は3-Aの少女達の下へと去っていった。

ネギ少年はただ腹立たしげにそれを見送るのみであった。

これはあにとしつとのおとぎばなし。

終わり。

追記：原作なんてなかった。

（後書き）

唐突に思い浮かんだので書いてみました。こういう設定の読ん
みたい。SS的な書き方の部分では文章作法はスルーしてくれると
ありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8255t/>

テンプレ犠牲者の日々【ネギま！ ネタ】

2011年10月8日03時10分発行